

学長の自己点検評価

原稿受付 2012年5月19日
ものづくり大学紀要 第3号 (2012) 3~6

神本武征

ものづくり大学 名誉学長

退任を控えた平成24年の1月、教育学術新聞の1月18日号を読んでいると私学高等研究所の両角研究員の私立大学の学長の選任に関する記事が目にとまった。私立大学の学長の選び方は多様だが学内外の候補者を複数だして、しかるべき方法で選出するのが良いのではないかと提案している。興味ある課題だが、本記事の主題ではないので、これ以上触れない。ついで著者は、学長は退任時に業績を評価されるべきと書いている。どんな貢献をしたか、何が達成できて、何ができなかったか、できなかった理由はなにかなどを明らかにすべしと論じている。おやっと思ったが、日頃、評価を受ける機会のない学長が退任時に評価を受けるのは当然だと納得。そこで3月28日に大会議室で開催された退任記念講演会の場で自己点検評価を実施した。本稿はその要約である。

2008年4月から2012年3月までの間に私が主導して行った事業の項目は次のようになる。

1. 総長室を特別会議室に改装
2. ものづくり通信の創刊
3. ものづくり大学紀要の創刊
4. FD推進委員会の新設
5. 学長プロジェクトの創設
6. 学生募集委員会の設置
7. 学科名の改定
8. 学長杯フットサル大会の創設
9. ドーミトリー映画大会の主催
10. ものりか教室の活動

就任した当時、代議員会などの重要会議はすべて大会議室で開いていた。2008年の夏のある日、冷房を効かせた大会議室で小人数の会議をしていた。省エネルギーの意識がないらしく蛍光灯も全て点けている。大会議室での会議はエネルギーがもったいないだけでなく、スクリーンを背にした学長の席からは委員の顔はよく見えないし、声も聞きとりにくい。これでは省エネに反するし、緊密な討議はできないと感じて定員20名程度の規模の小会議室を用意するよう総務課長に指示した。こうして出来たのが総長室を改装した現在の特別会議室である。現在、最も使用頻度の高い会議室として活用されている。

「ものづくり大学通信」と「ものづくり大学紀要」は創設間もない本学の知名度を上げ

るため情報発信の媒体として創刊した。通信はすでに第7号を発行し、紀要は本号で第3号となる。ともに有志の先生がたの献身的な努力によって実現したものである。FD推進活動については既に文部科学省から義務づけられていたにもかかわらず2008年当時は殆ど手つかずの状態であった。すなわち2008年度は学生アンケートを毎クォーター毎に実施し、業者に委託したマークシートの結果を束ねて教員に配布するのみであった。無意味な業務と出費であることを指摘して2009年度からはアンケートは隔クォーター毎とし、集計したアンケート結果を教員に返却して、それに対する改善案を提出するように改めた。当初は回収率が極めて低かったが2012年3月時点では80%程度になっている。そのほかのFD推進活動については本誌に掲載のFD推進活動報告をお読みいただきたい。

学長プロジェクトは「大学を元気にし、本学の存在感をアピールする企画」を趣旨として年間200万円の予算で2010年度からスタートした。建設学科から多くの応募があり、「新しい家づくりネットワークプロジェクト/代表白井裕泰教授」と「世界を変えたモノに学ぶ/原寸プロジェクト/代表八代克彦教授」の2件が採択された。前者は21世紀型木造住宅建設フォーラムを組織して、高校生を対象にした建築設計競技とものづくり大学模型制作合宿研修会を開催した。また一般人を対象に21世紀型木造住宅建設フォーラム設計競技、新しい伝統工法の家を開催して優秀作品を表彰している。さらに秩父市と「新しい家づくりネットワークプロジェクト連携に関する協定」を結んだ。

後者はフランスの著名な建築家ル・コルビュジェの地中海に面したカップマタンに在る小屋の原寸レプリカの製作を目指したもので、ル・コルビュジェ財団の許可を得るところから始めて、学生たちの現地調査を経て校内の池の傍にレプリカを建設した。両プロジェクトとも本学の実地教育の方針を余すところなく発揮したもので、高く評価される。今秋に予定されるカップマタン小屋の完成を楽しみにしている。

本学の入学学生数は開学の2001年から6年目まではほぼ定員360名に近い値を維持していた。しかし、その後、減少の一途をたどり2010年には219名まで低落した。これに危機感を抱いた教職員と対策について多くの討議を重ねた。対策の一つとして学生募集と入試業務を併任していた入試委員会から学生募集委員会を独立させて学生募集活動の充実を図ることとした。さらに外部コンサルタントの助言を得て2011年は238名、2012年は251名と入学者数は順調に回復している。関東圏のみならず遠隔地での募集活動を加え、引き続き予算・人材両面での注力が必要である。

本学の建学以来の学部・学科名は技能工芸学部・技能工芸製造学科と技能工芸学部・技能工芸建設学科であった。すでに建学から10年が経過して技能工芸という言葉が認知されてきたことを理由に、それぞれ「製造学科」と「建設学科」と簡潔な名称に変更した。高校生にも分かり易い学科名になったと思う。

学長は学内の業務だけでなく、対外的な活動に多く関わる。ものづくり教育論、ものづくり大学の教育内容に関して埼玉県企業団体、工業高校校長会などにおいて講演した。行田市の子育てネットワークでは「子供の教育論—生きる力とは」について講演した。論旨は「国の教育指針の表現は時代とともに変わるけれど、基本的に基礎学力と応用力の習得を目標とする場合が多い。応用力あるいは生きる力とは頭の中に整理された基礎知識の柔軟な活用にあるから、基礎知識はできるだけ多く詰め込んだ方がよい。知識の詰め込みを

否定して生きる力のみを強調することは大いなる間違いである」。聴講されたご婦人達から「すっきりしました」との感想をいただいた。

国際会議についてはタイのパタヤとチェンマイ、サウジアラビアのリヤド、岩手県立大学で行われた工業技能教育に関する国際会議に招待されて講演を行った。これらの会議では持論の”Parallel Learning in Theory and Practice”の考え方と具体的な教育モデルを紹介した。従来の工業技能教育では工学基礎、専門基礎、専門、実技実習と年次順に教えるが、学生は基礎学習で学ぶ知識をどのように使うのかイメージできない。また専門に進んだ時には基礎で習ったことを忘れがちである。”Parallel Learning in Theory and Practice”では、基礎理論を学んだら続けて応用の実験や実習を行い課題を頭と体で学習する方式を提唱している。提案のみでものづくり大学で実例モデルを実現できなかったのは残念である。

新聞、雑誌、業界紙などへの寄稿とインタビューには大学の広報の意味から積極的に応じた。また外部から依頼された機関の外部評価の仕事も多く行った。防衛省技術研究本部の外部評価では委員長として4研究機関と2センターの評価をまとめた。また明治大学情報機械工学科、愛知工科大学、埼玉工業大学機械系学科の外部評価委員を務めた。そのほか知的財産高等裁判所・専門委員、NEDO技術委員、自動車製造物責任相談センター・審査委員、日揮・実吉奨学会理事、ヤマハ発動機国際友好基金運営委員、理工学振興会評議員などを勤めた。

学長も研究者のはしくれなので、在任中に著書、学術論文をいくつか執筆した。以下にまとめる。

著書:

1. Flow and Combustion in reciprocating engines, Arcoumanis C., and Kamimoto T., Springer-Verlag Berlin Heidelberg, 2009
2. 夢の将来エンジン, 神本武征 監修・著, 自動車技術会, 2009

国際ジャーナル

1. Light scattering technique for estimating soot mass loading in diesel particulate filters, Kamimoto T., Murayama Y., Minagawa T., and Minami T., *International Journal of Engine Research Vol.10, Special Issue, Dec.2009, pp.323-336*
2. Re-examination of the emissivity of diesel flames, Kamimoto T. and Murayama Y., *International Journal of Engine Research Vol.12, Issue 6, Dec.2011, pp.580-600*

著書1は日欧米の著名なエンジン研究者（友人）を集めて執筆した専門書である。共編著者のC Arcoumanis教授は私が名誉客員教授を勤めるCity University Londonの副学長である。論文2では1932年にMITのHottel and Broughtonが提案した輝炎の射出率に関する実験式を理論的に解明すると同時に、スス凝集体の散乱理論に基づく新しい射出率の理論式を提案している。在任中に私の40年来の宿題を解決することができて満足である。

以上の活動を自己点検評価すると次のように総括される。広報、文化活動は通信と紀要の創刊、学長プロジェクトの創設、学長杯フットサル大会の創設などの実績から評価A。教

育推進活動は別記事に書いたように色々チャレンジしたが、実質的な成果に乏しいので評価 C。教員に対する説明不足と根気負けが反省点。対外活動は学長として並みレベルと思われるので評価 B。以上が学長の自己点検評価であり、この評価の適否は読者におまかせする。

ものづくり大学はまだ創設 11 年の若い大学である。教育設備と実習環境は我が国でも屈指のレベルにあり、また教育カリキュラムも現場のものづくりに重点を置いた特徴あるものである。しかし本学の更なる発展のためには継続的な教育改革が必要であり、FD 推進活動を鋭意続けることが肝要である。製造学科には国際活動で述べた”Parallel Learning in Theory and Practice”の導入を含めて世界の模範となるべき“ものづくり教育モデル”の創出を期待したい。また建設学科には「短期的には東日本震災の復興、長期的には 20 世紀に拡大した都市を持続可能なコンパクトな都市に再構築すること」を期待している。21 世紀型木造建築を目指すフォーラムの活動に注目している。

4 年間の学長職を無事終えることができたのは教職員のご支援に依るところが大きい。誌面を借りて感謝するとともに、今後の教職員のご健闘と本学の発展をお祈りする。
